

「文学」から離れて文学を考える

「事実」と「フィクション」の間

レポート
 2016.10.15
 [sat]

現実がフィクションに働きかけ、フィクションが現実を動かす。そうしたダイナミックな関係の中で両者をとらえ、新たな文学研究の楽しみを発見しようという意図により、本講座が開催されました。評論や地域研究の第一線で活躍されている2人の講師をお招きするとともに本学の英文学研究者も講演を行い、またそれぞれの専門をもとにディスカッションを展開しました。多くの一般の方のご来場のもと、18世紀から21世紀、そしてベトナム戦争からくまのパディントンまで、幅広い視点で「文学」を見つめるひとときとなりました。



講演

『ガリヴァー旅行記』の修辞学と政治学

島 高行氏

(企画、司会 実践女子大学 文学部英文学科 教授)

『ガリヴァー旅行記』を題材に、この空想旅行記に当時の社会状況がどのように反映されているか、また作者ジョナサン・スウィフトの諷刺がどのように表現されているかについて分析されました。そして事実を作者の想像力で変容する意義について解説されました。

『ガリヴァー旅行記』は、イギリスで1726年に出版されました。作品の時代背景を見ると、出版前の17世紀はイギリスにとって激動の時代で、対外的にはフランス、宗教ではカトリックとプロテスタントとの対立がありました。また経済面ではイングランド銀行が設立され(1694年)、紙幣や国債が本格的に流通するようになりました。18世紀に入ると、国策会社の破たんを契機とする、イギリス最初のバブル崩壊として有名な南海泡沫事件が起こります(1720年)。この混乱を收拾して実権を握った政治家が、ロバート・ウォルポールでした。

作品の原題(*Travels into Several Remote Nations of the World*)を直訳すると「世界のさまざまな国への旅」というほどの意味になり、本当の旅行記と変わらない体裁で出版されたことが伺えます。この中でガリヴァーは小人の国や巨人の国を訪れます。ガリヴァー自身の大きさは変わりませんが、小人の国では巨人、巨人の国では小人として扱われます。大きさは周りの環境で変わる相対的なものと示され、1枚の株券の価値が目まぐるしく変わるポスト・バブル時代のイギリスの経済構造が反映されています。また小人の国で地位を上げるには、皇帝の前で綱渡りの技を披露しなければなりません。ここにも、先述のウォルポールが金銭にまつわる醜聞の絶えない人物であり有力者の好き嫌いで地位が決まるという、当時の政界の腐敗が書き込まれています。卵をどちらから割るかという「卵割り論争」にも、キリスト教におけるカトリックとプロテスタントの対立についての諷刺が込められています。作者は18世紀前半のイギリス社会の在り方や宗教対立を特異な手法で変容して描き、諷刺という形で批判していると言えるでしょう。主人公ガリヴァーのキャラクターについて注目したいのは、他国を武力で支配する帝国主義的な小人国の皇帝に敢然と抵抗することです。これは作者が、イギリスに実質的に植民地支配されていたアイルランドの出身であることが関係していると考えられます。

『ガリヴァー旅行記』は空想物語ですがいかにも本当らしい旅行記のスタイルで書かれ、内容にも18世紀イギリスの経済、政治、宗教的な現実が盛り込まれています。フィクションの中に事実が反映され、事実を変容させることでフィクションが新たな問題を投げかける作品として読むことができます。



講演

開高健とベトナム戦争

武田 徹氏

(評論家、ジャーナリスト)

ベトナム戦争に従軍した経験をもとにルポルタージュを発表した作家・開高健が、自身の苦い反省などを起点に、どのような試行錯誤のもとで作品世界を育てていったかが紹介されました。また、フィクションとノンフィクションを分ける風潮に対して問題提起がなされました。

芥川賞受賞後、小説に行き詰った開高健は、1964年11月から翌年2月までベトナム戦争の従軍取材を行い、その報告を週刊朝日に9回にわたって掲載しました。ポイントになるのが、激戦に巻き込まれた第8回です。帰国後、開高は単行本『ベトナム戦記』をまとめましたが、このルポルタージュ作品の出来に満足していなかったようです。その後、開高はベトナム戦争をモチーフとした小説『渚から来るもの』を執筆します。これを「架空の国を舞台にした寓話」だと宣言したも

のの、小説として読まれなかった、といったことを後に彼は言っています。

そして今度こそ小説として書くと、1968年に『輝ける闇』を刊行します。これは開高だからこそ書けた、新しい形の作品なのではないかと私は思っています。激戦に巻き込まれ這いつくばっていた時、弾が飛び交う中でご飯を食べるベトナム兵の姿を開高は見ます。『渚から来るもの』では銃弾の中で兵士を見たという記述があるのみですが、『輝ける闇』では開高が近くで駆け回っているのを見ても見えていた、そして何の関心も示さなかった、というところまで書いています。前者では見ているだけですが、後者では見つめる視線が相手に見つめ返され無視される、あたかも存在を認めてもらっていないようなところまで書き、「見る、見られる」中に、兵士と自分、戦争と自分の関係を落とし込んでいます。現実の何らかの経験を単なるルポルタージュではなくさらに豊かな文学として育てていくことを模索した、それが『ベトナム戦記』から始まって『輝ける闇』に至るまでの過程だったと考えられます。

「フィクションとノンフィクションの間には膜一枚の隔たりもない」といったことを開高は言っています。日本でノンフィクションが確立していったのは1960~70年代だと思われがちですが、これ以降、小説家はフィクション、ノンフィクション作家はノンフィクションを書くという分業が自明の理となっていきました。しかし開高がたどった経緯も踏まえると、こういった分類は文学の可能性を狭くしてしまうのではないのでしょうか。フィクションとノンフィクションは、いろいろな力関係の中で揺らぎその都度作品を形づくっていく関係なのではないかと思えます。



21世紀の コンゴ民主共和国で 『闇の奥』を読む

講演

武内 進一氏 (日本貿易振興機構アジア経済研究所 地域研究センター長)

コンゴ研究の日本第一人者である講師が、コンゴ滞在中にジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』を通読。作品に描かれている作者の実感に自身の思いを重ね、同意できる点、できない点を見つめました。また、滞在中に撮影されたコンゴの風景写真も披露されました。

『闇の奥』は、1902年に出版されたコンラッドの中編小説で、コンゴ自由国(1885～1908年)が舞台になっていると考えられます。この国は、アフリカを植民地分割するためのベルリン会議(1884～1885年)によって誕生しました。体裁上は独立国だったものの、実際はベルギー国王の私有領でした。

内容はマールウという船乗りの体験談で、コンゴの奥地で莫大な量の象牙を出荷しているクルツという人物が病気のため迎えに行ったところ、彼が原住民から象牙を強奪していたことがわかります。またクルツは精神も病んでおり、原住民の首を現地事務所の周りにさらしたりしていました。結局クルツは「恐ろしい(The horror! The horror!)」と呟いて死にます。この話はフィクションですが、作者の実体験に基

づいており、彼が感じたことが書かれているといってもいいと思います。

『闇の奥』の中で作者がどのような感情を描いたのかを見てみると、いくつか発見がありました。彼が書いていることの一つは、貿易会社の社員である同僚への嫌悪感です。これは、ヨーロッパの建前に対する不信と嫌悪の表れと読み取れます。アフリカ人は忌まわしい習慣を持っているから文明化するのだとヨーロッパ人は植民地化を進めるものの、実際は金儲けや搾取が目的だということが作者にはよく見えています。植民地支配に対する本音と建前、その馬鹿馬鹿しさ。この時代に作者がそれを描いた点が非常に興味深いです。アフリカ人に対しては複雑な眼差しがあると感じました。野蛮人だと盛んに強調しながらも、「彼らも俺たちと同じように人間なんだ」という記述が出てきます。またアフリカ人女性の描き方が印象的で、そこにはよそ者としてアフリカに触れた時の違和感とともに畏敬の念が書き込まれています。そうした感情は私の中にもあります。

私は『闇の奥』に描かれているアフリカに対する畏怖・畏敬の念と「よそ者」感には同意します。しかし、同意できない点もあります。「静かで寂しいところ」という描写が何度も出てくるのですが、それはフィクションで、コンゴはやかましく賑やかでエネルギーに満ち溢れたところだと私は感じています。この作品を読んで、アフリカに接していると自らの卑小さに気づかされることに、改めて思いを馳せました。

▶2016年夏にコンゴを訪れた講師が撮影したコンゴ川の風景。この川は作品にも登場する。



こぐまとしての移民 —『パディントン』から見る 現代イギリス

講演

土屋 結城氏 (実践女子大学 文学部英文学科 准教授)

映画『パディントン』を取り上げ、そこに現代イギリスとヨーロッパの大きな課題となっている移民の問題が盛り込まれていることを紹介。難しいテーマを、誰もが楽しめるエンターテインメント作品として仕立てた手法などについて解説が行われました。

小説 *A Bear Called Paddington* は、1958年にマイケル・ポンドによって第一作が発表されました。南米ペルーからやって来たくまのパディントンがブラウンさん一家と暮らし始め、いろいろな騒動を起こすというストーリーです。この小説が先年、映画化されました。これがイギリスの雑誌『タイム・アウト』のWeb版で、「ロンドンがnewcomerを歓迎し、いかに多様な社会に生きることを喜んでいるかについての映画」だと紹介されました。

2016年8月、映画のオフィシャルツイッターに「ぼくはいつもノッティングヒ

ル・カーニバルのカリプソ音楽を楽しんでいるよ」というパディントンのつぶやきがアップされました。このカーニバルは8月下旬にロンドンのノッティングヒルで開催されるもので、西インド諸島から来た移民の祭典です。またカリプソ音楽は西インド諸島のトリニダード島で発展したもので、1948年6月にイギリスに到着した *Empire Windrush* 号に乗り込んでいたロード・キッチナーがこの音楽をベースにした「London Is the Place for Me」という曲を作り、上陸時に歌いました。この歌は、映画でパディントンがロンドンに着いた時に流れる曲となっています。

さらにもう一つ深い意味合いが読み取れます。ノッティングヒル・カーニバルの起源は、イギリス国内の移民排斥運動に心を痛めたトリニダード島出身のクラウドディア・ジョーンズが生まれ故郷の文化を紹介するために行ったウォークです。その根底には、自分たちの文化を示してイギリスの人々との共生や融合を図りたいという思いがあったようです。パディントンのつぶやきの背景には、異文化の人々との共生を模索してきたイギリスの歴史が重ねられていると考えられます。

児童文学研究者の青木由紀子氏は、「物語の中の動物とは、“大人と子どもの境界を自由に乗り越える”ことができる存在」と述べていますが、パディントンはまさにそれを表現しています。さらに映画では移民の役割を与えられました。移民問題をストレートに描くのは難しいものですが、現代の複雑な問題を扱った作品も動物の姿に託すことで楽しみながら見ることができる、そんな側面があるのではないかと思います。テーマを動物にうまく仮託して、また50年という時を経て新たに意味を付与することで現代的な作品になった。それが映画『パディントン』だと考えられます。

パネル・ディスカッション

4名の講演を踏まえ、『事実』と「フィクション」の間についてより考察を深めるディスカッションを実施。講師たちからは、自身の実感に基づいた提言や、意見などが寄せられました。

島: 『渚から来るもの』に関して、開高健が寓話として書いた作品なのに現実の比喩として読者に読まれてしまうことに違和感があった、というエピソードがありました。自分の意図とは異なる意味付けを他者からされることに対して、否定的な思いがあったのでしょうか？

武田: 『渚から来るもの』については開高の言い分は無理があり、ベトナムに取材に行った人が、アジアが舞台の作品を書いたのですから、どうしても読者は現実との重なりを読み込んでしまいます。またその後、開高は作品を逆に比喩として書いていくわけですから、言っていることと行動が逆です。そのねじれも考えると、この問題は一筋縄ではいかない気がします。

島: 『闇の奥』でクルツは、最後に“Horror”という言葉を使います。“Horror”は「ぞっとする」といった、内面的な恐怖のニュアンスのある言葉です。武内さんは現地で、こういった感情を抱いたことはありましたか？

武内: 植民地支配が最終的にクルツのような存在をつくった。そのことも含めてhorrorという言葉を使って死んでいく、それを私も経験したかというのは大変重い問いです。私も、日本人としてアフリカに関わっていく中でマールウが貿易会社の同僚に抱いたような感覚を持ったことがあります。今、日本はアフリカとの関係を深めようとしています。その中で違和感や摩擦があるのは避けては通れない、それにどう対処していくのか我々に問われていると考えています。

島: くまを主人公にすることは現実的にどんな効果をもたらすのか、また、映画『パディントン』をイギリスはどう受け止めたのかも聞かせてください。

土屋: イギリスには伝統的にくまが物語に登場する傾向があるとともに、動物が主人公の作品も多く、『パディントン』もそうした系譜の物語なのではないかと思います。映画の受け止められ方としては、まさに移民問題が重ね合わされているという評価がある一方、パディントンは特に移民というわけではなく、居場所を探す存在なのではないかという指摘もありました。

来場者アンケートから (抜粋)

- 「文学」というものの積極的な意味付けがなければ減ってしまうのではないかと昨今の状況において、意義深い企画だったと思います。(男性・30歳代・その他)
- 一人ひとりの発表時間が短いながらも、充実した論が展開されていて聴きごたえがありました。外部からの講師のお話も楽しかったです。(女性・40歳代・渋谷区在勤)
- 「文学」から離れて文学を考える、というコンセプトに興味を感じて受講しました。事実背景のある話で、社会を考える上でとても参考になりました。(男性・40歳代・渋谷区在住)
- 改めて、事実とフィクションについて考えさせられました。興味深いテーマでした。(男性・70歳代・その他)